Number.7
2010/3

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

News Letter

演劇・映像の国際的教育研究拠点

■ 特集記事1
国際シンポジウム
「演劇・舞踊・芸術環境　日仏交流の20世紀」
■ 特集記事2
日本演劇・映像研究コース：
研究報告会
「文楽フィルム『日本の人形劇』
(MARIONNETTES JAPONAISES)」

■ 活動報告
●西洋演劇研究コース　P4
●日本演劇研究コース
●映像研究コース　P5
●東洋演劇研究コース　P6
●舞踊研究コース　P7
●芸術文化環境研究コース　P8
■ 新刊紹介　P6
■ イベントカレンダー　P8
編集後記

特集記事 1 報告

国際シンポジウム「演劇・舞踊・芸術環境　日仏交流の20世紀」

日時：2009年11月25日（水）～27日（金）
会場：世界文化会館（25日）、パリ日本文化会館（26日）、
フランス国立図書館新館（27日）
主催：早稲田大学演劇博物館グローバルCOE・パリ日本文化会館・パリ第10大学演劇映画学科・フランス国立科学研究所（CNRS）

国際シンポジウム「演劇・舞踊・芸術環境　日仏交流の20世紀」は、演劇博物館グローバルCOEが初めて国外で主催する企画となった。パリ市内3会場で催された3日間の研究集会には、日仏両国のみならず欧州各国の幅広い研究者・芸術家が結集して研究発表と討議を行った。GCOEからは事業推進担当者2名、研究助手1名、客員講師2名、研究協力者3名、研究員3名が発表者としてこれに参加し、GCOE事務局の2名がその運営をサポートし、合計で200名を超える来場者を得て、質と密度の高い研究交流を実現することができた。

1900年のパリ万国博覧会において、川上音二郎、貞奴の一座がロイ・フラー劇場で公演をおこない、フランスの芸術界に大きな衝撃を与えてから、今日に至るまで、フランス大使としてのポール・クローデルの来日、岸田國士らのフランス留学・文学座設立、ジャン＝ルイ・バローと観世寿夫の演劇交流、さらに大野一雄らの舞踏がフランス舞踊界に与えた衝撃など、日本とフランスの舞台芸術は節目ごとに互いに大きな影響を与えてきた。芸術交流の環境整備が進んだ近年、日本を訪れるフランス人演劇人・映画人の数はさらに増え続け、交流のあり方も多様化、複雑化してきている。本シンポジウムは、この日仏間芸術交流の一世紀を多面的に検証する国際共同研究の総括の試みであると同時に、21世紀COE、グローバルCOE事業を通じて学術交流を積み重ねてきたパリ第7大学、パリ第10大学、国立科学研究所（CNRS）と共同してこれを実現することで、相互の協力関係をさらに強固なものとすることを目指して開催された。

初日は、竹本幹夫（早稲田大学演劇博物館館長・グローバルCOE拠点リーダー）、クリスティアン・ビエ（パリ第10大学）両氏の開会の辞によって幕を開け、続くセッション「日仏交流の歴史と現在」において、ジョルジュ・バニュ氏（パリ第3大学）が演劇文化の日欧間の差異について、渡邊守章氏（京都造形芸術大学、演出家）が日仏間の舞台芸術の受容について大局から論じられた。続く二つのパネル「伝統と革新　20世紀初頭のヨーロッパにおける相互関係」（モデレーター：ベアトリス・ピコン＝ヴァラン　CNRS、2009年度GCOE上級研究員）と「巨

特集記事 1

匠たちの出会いと対話」（モデレーター：スタンカ・ショルツ＝チョンカ　トリアー大学）では、日仏演劇交流史に大きな軌跡を記す局面に焦点を絞った研究成果が歴史的映像や資料の紹介を交えて発表された。この日は、フランスにおいて平田オリザ作品の上演で知られるアルノー・ムニエが演出したユニークなパフォーマンスとトークで締めくくられた。

二日目は、戯曲翻訳でも活躍する気鋭の演劇研究者の研究発表と討論による「現代演劇と翻訳」（モデレーター：藤井慎太郎　GCOE事業推進担当者）、異なる文化的背景から日本の舞踏を分析する研究者の発表による「舞踏と現代ダンス」（モデレーター：パトリック・ドゥ・ヴォス　東京大学）の二つのパネルが開催された。また、「現場からの証言」と題したラウンド・テーブル（モデレーター：クリストフ・トリオー　パリ第7大学）には、日本に滞在した経験をもつフランスの代表的演出家、振付家6名が積極的に参集してくださった。日本という異文化に身を置いた経験が自らの創造活動の根幹にもたらした影響を語る芸術家の率直かつ真摯な言葉に、みな一心に聞き入っていた。

最終日プログラムの冒頭では、フランス国立図書館より同館舞台芸術部所蔵コレクションにみられる日本演劇の表象について紹介していただいた。この日のテーマは現代と未来の舞台芸術交流であり、「芸術交流を支える制度と環境」（モデレーター：エマニュエル・ヴァロン　パリ第10大学）で芸術交流の環境整備に関わる文化政策的背景が検討された一方、「現代舞台芸術におけるコラボレーション」（モデレーター：クリストフ・トリオー　パリ第7大学）ではとりわけこの10年間の日仏舞台芸術交流の質的変化に注目しながら、より大きな視点に立って二国間共同制作、作品上演交流の発展が論じられた。また、ラウンドテーブル「日仏共同プロジェクトのこれから」（モデレーター：ベルナール・フェーヴル・ダルシエ　前アヴィニョン演劇祭ディレクター）では、創造現場に関わる演出家、制作者が熱い議論を繰り広げた。

最後に、多大な協力を惜しまず与えてくれたフランス側研究機関、会場として私たちを迎えてくれた文化施設、貴重な助成を賜った笹川旧仏財団の関係各位に、あらためて謝意を表したい。演劇研究における日仏間の研究交流がこれを契機として今後さらに深まっていくことを強く願う。本研究集会の成果をフランスの代表的演劇専門誌である『Théâtre/Public』に2010年度中に掲載すべく、現在、準備を進めている。本稿では紙幅の都合で示せなかった詳細なプログラムはNews Letter第6号および演劇博物館グローバルCOEウェブサイトに掲載されているので、合わせてご覧いただければ幸いである。

（事業推進担当者　藤井慎太郎）

特集記事 ② 日本演劇研究コース・映像研究コース：

研究報告会「文楽フィルム『日本の人形劇』（MARIONNETTES JAPONAISES）」

2009年12月22日（火）13:00 ～ 16:15　小野記念講堂

演劇博物館グローバルCOEは、2009年度にフランス・パリのアルベール・カーン博物館が所蔵する文楽フィルム「MARIONNETTES JAPONAISES」3巻を入手（購入）した。日本演劇研究コースと映像研究コースは共同で「文楽フィルムプロジェクト」（日本演劇は内山美樹子、桜井、映像研究は武田潔、小松弘）を立ち上げ、このフィルムの考証、購入に至るまでの交渉、そして映像のデジタル化を行った。入手から半年しか経っておらず、まだ研究途中ではあるが、研究者のみならず広く一般にも見ていただきたい映像であるので、映像の上映を含む「研究報告会」を開催し、現時点での研究成果を報告した。

はじめに、カーン博物館との交渉にあたった武田潔教授により、「文楽フィルムとアルベール・カーン博物館」の題で報告があった。パリ近郊にあるカーン博物館（1986年開館）の位置をインターネットのグーグルマップで示し、コレクションの主であったアルベール・カーン（1860 ～ 1940）の人物と業績についての解説のあと、このフィルムを入手するに至った経緯を述べられた。

次に小松弘教授が「文楽フィルムの映画史的意義」という題で、初期の日本映画史研究の立場から報告があった。2003年にフランスの映画研究雑誌でカーン特集が組まれるほど、近年の映画史研究においては記録映画が大きな意味を持つに至っているという現状をふまえたうえで、おもにフランスや日本の映画雑誌類に現れた記述を中心に詳細に解析された。

続いて桜井が、フィルムの上映と解説を行った。フィルムには当然音声がないので、フランス語で書かれた字幕や映像に映し出される人物などについての解説をしながらの上映（42分）となった。フィルムのほとんどが1921年に劇場公開された映画「文楽座人形浄瑠璃」であり、後年（1927年か?）、大阪・道頓堀で改めて撮影された3カットとフランス語の字幕を加えて再編集され、フランスに輸出されたものであろうと推定した。

15分間の休憩をはさんだ後、「文楽フィルムから見えるもの」というタイトルで、プロジェクトリーダーでもある内山美樹子教授が文楽史の立場から話をされた。大正末から昭和初期の文楽

は、興行形式が変化し、演者の世代交代が進むなど大きな変革期であり、その中での初代栄三、文五郎、文三、そして伝説的な名人・三代清六らの動く映像を目にすることができた喜びと意義が述べられた。

続いて逍遙協会理事の菊池明氏にゲストとしてご登場いただき、1942 ～ 43年頃ご覧になった初代栄三（1945年没）の芸について思い出を語られた。後半は内山教授との対談となり、栄三と文五郎の芸の相違、山城少掾にまで話が及んだ。

菊池氏が退場された後、桜井が加わり、映像（カット）の順番が前後している「十種香の段」（第2巻）の八重垣姫のクドキの部分について、この部分のみ映像の順序を整理したものを上映した。また、これと「妹背山道行」（第1巻）の一部に、フィルムの撮影とほとんど同時期に録音・発売されたSPレコードによる音声を、試しに合成させてみたものも上映した。無音の映像だけの時とは異なり、同時代の音声が伴うことによって、88年前の舞台が生き生きと再現される瞬間は感動的であった。と同時に、現在の文楽と基本的な振り（所作）は全く変わっていないことがよく分かった。伝統芸能なので当然のことと頭では思っているが、今回初めてそれが目と耳とで確認されたのである。

このフィルムは、現存する文楽に関する映像のなかで、最も古くかつ最長のものであることは間違いない。今回は研究途中の報告であったが、今後、演劇（文楽）と映像の双方からさらなる研究が進められることを期待したい。また、演劇博物館では準備が整い次第、AVブースにおいて視聴サービスに供する予定であるとのことなので、当日ご参加いただけなかった方にも是非ご覧いただきたい。なおこの「研究報告会」については、事前に朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、共同通信等で、事後に読売新聞に関連記事が写真入りで掲載されたほか、12月24日 のNHK-TV「芸能花舞台」では、「今年の話題」の中で「文楽の映像発見」として取り上げられ、映像の一部も紹介された。

（GCOE客員講師　桜井弘）

西洋演劇研究コース：

■演劇論講座（西洋全体企画）

広く文芸・演劇評論の分野で活躍されている川崎賢子氏をお迎えし、宝塚歌劇の歴史的背景やアジア諸国との交流について、映像や貴重な資料を交えてお話いただいた。

日時：2010年1月19日（火）　18:30～20:30
講師：川崎賢子氏（文芸・演劇評論家）
演題：宝塚スタイルの内部と外部―宝塚歌劇団95周年の過去・現在・未来
場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

■ベケット・ゼミ（岡室美奈子）

国際サミュエル・ベケット協会会長で、国際演劇学会ベケット・ワーキンググループのオーガナイザーも務めるリンダ・ベン-ツヴィ氏によって講演が行なわれた。講演後に設けられた質疑応答では、ベケット作品上演の新たな可能性やそれが少なからず孕む問題系についての議論が活発に交わされた。またベン-ツヴィ氏には、4回の連続セミナーで研究員への直接の指導を行なっていただいた。

日時：2009年11月14日（土）　17:00～18:30
場所：早稲田キャンパス 14号館5階 515教室
講師：リンダ・ベン-ツヴィ氏（テルアビブ大学、コロラド州立大学名誉教授）
タイトル：「21世紀におけるベケットのテレビ作品」

■身体表象論研究会（坂内太）

2008年2月から進めている、モダニズムにおける身体表象論研究会を継続的に開催した。

日時：2009年10月16日（金）　13:00～15:30
　　：2009年12月18日（金）　13:00～15:30

■ポストコロニアル演劇研究会（澤田敬司）

発表者の長門洋平氏は、溝口健二『赤線地帯』の音楽における異化効果の可能性についての考察を、実際の映像や音声を交えながら行なった。

日時：2009年11月10日（火）　15:00～17:00
場所：国際会議場4階　共同研究室7
発表者：長門洋平（グローバルCOE研究員、総合研究大学院大学博士後期課程）
タイトル：「溝口健二『赤線地帯』（1956）の音響デザイン」

■フランス語舞台芸術研究プロジェクト（藤井慎太郎）

フランス語を作業言語として用いている研究員を対象に「研究のためのフランス語」ゼミを定期的に開催し、現代ダンスに関する論考などの講読を行った。

第1回　2009年10月20日（火）　18:30～
第2回　2009年11月10日（火）　18:30～
（会場は全て戸山キャンパスプレハブ校舎2 階第2会議室）

■シェイクスピア・ゼミ（冬木ひろみ・本山哲人）

第4回講演会では、市川真理子氏に、シェイクスピアが執筆を行なっていた当時のオリジナル・スティジングを、いかにしてテキストから解読していくかというテーマでご講演いただいた。第5回は、森祐希子氏に『ロミオとジュリエット』のバルコニーシーンについて、舞台版・映画版の両方を視野に入れた解釈の可能性をお話しいただき、第6回は、末松美和子氏に、シェイクスピア劇上演における特に上演空間に着目したご講演をいただいた。

日時：2009年11月14日（土）　15:00～17:00
講師：市川真理子氏（東北大学教授）

日本演劇研究コース：

活動報告

■演劇舞台構造の国際比較研究集会

日時：2009年12月11日（金）12日（土）　10:00 ～ 17:00
会場：大隈会館N棟201・202会議室

12月11日（金）
「研究集会の進行について」
「日本の散楽・猿楽が鑑賞される場について」竹本幹夫（拠点リーダー、演劇博物館館長）
「演劇・芸能の舞台および劇場の成立」馮俊傑（山西師範大学戯曲文物研究所名誉所長）
「山西省の非祭祀劇場とその演劇について」王福才（山西師範大学戯曲文物研究所副所長）
「討論」

12月12日（土）
「能の劇場における桟敷と舞台」宮本圭造（法政大学能楽研究所准教授）
「建築構造から見た芝居小屋の発達―屋根構造を中心にして―」賀古唯義（(財)文化財建造物保存技術協会文化財建造物修理上級主任技術者）
「江戸歌舞伎の劇場ならびに舞台の特色」古井戸秀夫（東京大学教授、GCOE客員教授）
「中日伝統劇場の回り舞台についての考察」車文明（山西師範大学戯曲文物研究所所長）
「討論」

日本演劇研究コースの主要研究の一つに「日中欧の舞台構造の国際比較」がある。演劇の分野と国境を越えた研究を目指し、これまで、チェコの劇場および資料の調査、「ヨーロッパバロック演劇舞台・劇場構造に関する研究会」の開催、中国山西師範大学戯曲文物研究所主催の国際研究集会での講演等をおこなってきた。これらの成果を踏まえつつ、研究をより深化するために、山西師範大学から三名の講師をお招きし、日本からは能と歌舞伎の専門家が集い、日中の舞台構造をテーマにした研究集会を開催した。

初日は問題提起のあと、竹本氏が、能舞台の特徴的な要素「橋掛かり、舞台上の屋根、板張りの床」が世阿弥の時代には確認できることを指摘し、これらが確立した過程を、猿楽や百戯等の演劇空間を分析して論じた。馮氏は、中国の舞台と劇場の発生について、『史記』や『漢書』等の記述を引用して論じた。王氏は、神廟以外の演劇空間をテーマに、家祠、屋敷の広間、田畑等について、山西省の遺構を実例に紹介した。

二日目は、宮本氏が、三種の演能（神事能、勧進能、御殿の能）の場について、舞台と桟敷の関係性を中心に論じ、近代の能舞台の原型が江戸城奥の舞台であると指摘した。賀古氏は、近世の歌舞伎の劇場は「仮掛けの小屋」と指摘し、日本古来の屋根の葺き方の特徴をふまえ、当時の劇場の防火・防水・採光の実状を具体的に考察した。古井戸氏は、初期歌舞伎と18世紀の歌舞伎の劇場、また江戸と上方の舞台装置がそれぞれ異なる特徴をもつことを示し、江戸歌舞伎の精神と演劇空間の関係を論じた。車氏は、歌舞伎が発明した回り舞台とセリの歴史を概観し、同様の機構をもつ中国の舞台遺構を紹介した。

山西省は中国のなかで、最も多く舞台遺構が残る土地である。中国の講師の研究はその地のフィールドワークに基づいており、文献以外にも、古くは金代（1115 ～ 1234年）から明・清代までの数多くの遺構が紹介された。一方、日本の舞台遺構ははるかに少なく歴史も浅いが、文字資料と絵画資料を丹念に読み解くことで、古代から近代初頭までの演劇空間の変遷が明快に示された。中国では早くから常設舞台を造っていたのに対し、日本は長く仮設の舞台が主流で序々に常設化した経緯が詳らかになり、両国の演劇空間の比較を通じて、劇場主や興行主の立場の相違までもが浮き彫りになったことは、特に興味深かった。今後の展望としては、中国の都市部の劇場や、日本の農村舞台をも包括した研究を期待するとの意見も聞かれた。

なお本研究集会は、竹本拠点リーダーが分担する特定領域研究「散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究」の研究成果発表の一部でもある。来年度発行の拠点の報告集に、詳細を掲載予定である。

（研究助手　埋忠美沙）

活動報告

タイトル：「シェイクスピア劇のオリジナル・スティジングの研究について」
場所：早稲田キャンパス26号館（大隈タワー）3階302教室

日時：2009年12月19日（土）　15:00～17:00
講師：森祐希子氏（東京農工大学教授）
タイトル：「テクストからスクリーンまで：『ロミオとジュリエット』のバルコニーシーン」
場所：戸山キャンパス36号館682教室

日時：2010年1月23日（土）　15:30～17:00
講師：末松美和子氏（群馬大学教授）
タイトル：「劇場空間とシェイクスピア」
場所：早稲田キャンパス26号館（大隈タワー）3階302教室

■「オペラ／音楽劇の総合的研究」プロジェクト（通称：オペラ研究会）（丸本隆）

21世紀COEの時から月1回の例会を継続してきたオペラ研究会では、今回初めて、研究員自主企画の連続ゼミ「折衷音楽劇としての寶塚」との連携による研究会を開催した。オペラ研究において、宝塚歌劇はTakarazuka Girl's Operaと言われることもあり、日本におけるオペラ受容史の観点からも重要な題材である。

日時：2009年11月27日（金）　18:30～20:30
講師：桑原和美氏（就実大学教授）
演題：戦前の西洋舞踊受容と「宝塚歌劇」―楳茂都陸平と岩村和雄の前衛―
場所：国際会議場4階　共同研究室7

日時：2010年2月19日（金）　18:30～20:30
講師：鈴木国男氏（共立女子大学教授）
演題：イタリアオペラ『アイーダ』と宝塚歌劇『王家に捧ぐ歌』
場所：120-1号館2階201号室

■17世紀フランス演劇研究会（オディール・デュスッド）

革命前後の時代の戯曲をとりあげて、何らかのリミットを超える挑戦的な試みが女性人物に観察されることを指摘し、それが当時の権力者に動揺を与える結果になったことを示した。

日時：2009年11月21日（土）　15:00～17:00
講師：高瀬智子氏（明治大学専任講師）
題目：18世紀末の女性作家の戯曲に見られる女性像について
場所：国際会議場4階共同研究室7

友谷氏は、「ラシーヌにおける悲劇的人物のコンセプト―中庸・過誤・「良さ」―」の題目で、ラシーヌの演劇理論について検討した。また千川GCOE研究員に「コルネイユ劇のヒロイン―その性格と恋愛」についてご発表いただいた。

日時：2009年12月19日（土）　15:00～18:00
講師：友谷知己氏（関西大学教授）
　　：千川哲生（グローバルCOE研究員）
題目：コルネイユとラシーヌの演劇理論
場所：早稲田キャンパス14号館804室

（研究助手　村瀬民子・菊地浩平）

映像研究コース：

活動報告

映像研究コース（映画史）では、2009年11月9日（月）と10日（火）に小野記念講堂にて国際研究集会「映画におけるジャポニズムとオリエンタリズム」を開催した。映画の歴史研究を地域研究の観点から捉えなおしてみようとする試みである。西欧のオペラや美術は19世紀以来日本や東洋に関心をもち、オリエンタルな主題をもつ作品が次々に生み出されていったが、19世紀末に誕生した映画は、そうした外側にある芸術におけるブームを容易に受け止め、自らの内に日本風、中国風といった視覚的特徴を作り上げていった。そうした映画史的事実を前提として、映画にも日本文化にも造詣が深い3人の外国人研究者が、この研究集会のために招かれた。

現在オーストリアを代表する日本学研究者であるローランド・ドメニグ氏（ウィーン大学准教授）は、1960年代の新宿文化などに関心をもっておられるが、ここ数年は日本における映画前史に関して、とりわけ写し絵に関して集中的なリサーチを行っている。今回は1920年代を中心とした、ドイツ語圏の映画において日本がどのように表象されていたかについて興味深い講演を行ってくださった。スイスから招聘したマリアン・レヴィンスキー氏（チューリヒ大学講師）は、かつて衣笠貞之助の「狂った一頁」に関する詳細な研究で学位をとった方で、近年はイタリア、ボローニャ市で毎年開かれている復元映画祭のコーディネーターとして活躍されている。レヴィンスキー氏は20世紀初めのヨーロッパ映画に見られる日本の表象に関して、大変貴重な映像を用いて、非常に具体的な話をしてくださった。まだ劇映画がドミナントな映画形式として成立していない時期に、ヨーロッパ映画は様々な形で日本の表象を取り入れていた。氏の講演はさらに初期の映画史に関してまだまだ解明されていないいくつかの重要な問題を提起する、意義深いものであった。スウェーデンの日本学者マッツ・カールソン氏は、現在オーストラリアのシドニー市にお住まいで、シドニー大学で日本文学の講座を担当している。カールソン氏は現代映画における、西洋人の東洋に対するまなざしの問題を、これも具体的作品を用いて検討してくださった。映画史研究は古い時代の作品を扱うことが多く、ともすれば現代映画を見過ごしがちなところがあるが、カールソン氏の講演は、古い映画より現代映画を見なれている学生の参加者らには強い説得力をもったようであった。

このほか、事業推進担当者である小松弘は、1910年代にフランスの映画会社パテ・フレールが設立した小さな映画会社ジャパニーズ・フィルム社を取り上げ、フランスで在仏日本人俳優を出演させて日本映画を作ることの意味について講演を行った。グローバルCOE研究員も研究発表には積極的に参加してくださった。土田環氏は戦後の欧米映画におけるインドというテーマについて考察し、碓井みちこ氏は写し絵の表象の中に日本固有の映像の主題を見るという研究に関して報告してくださった。山本律氏は博士論文のテーマでもある1990年代の中国映画に、作家たちの意識的なオリエンタリズムという戦略を認める発表を行った。志村三代子氏は、ロサンゼルスのマーガレット・ハリック図書館でのリサーチの成果でもある、ハリウッドで製作された蝶々夫人映画に関するテクストの分析を行った。また、マリアン・レヴィンスキー氏の講演の通訳として、小川佐和子氏が働いてくださった。

このたびの国際研究集会は、映画史学においては近年になって取り上げられるようになった、地域研究とのコラボレーションという実験的なテーマで行った。準備には数カ月を要し、今回出席できなかった外国の研究者たちとも数回にわたって意見交換を行った。様々な研究のための問題点が浮き彫りにされたという意味において、この研究集会は成功だったと言える。これまで我々が集めた映画フィルムの上映も、研究集会を盛り上げることに役立ったと思う。

（事業推進担当者　小松弘）

東洋演劇研究コース：

活動報告

東洋演劇研究コースでは、2009年12月に華南師範大学との共催で開催した「清末民初新潮演劇」国際シンポジウムと、2009年12月と2010年2月に計3回開催した特別講義について報告する。

■「清末民初新潮演劇」国際シンポジウム

東洋演劇研究コースは中国広州の華南師範大学との共催により、2009年12月26日から28日を会期として、「清末民初新潮演劇」国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、21世紀COEプログラムの時代に開催された春柳社百年記念国際シンポジウム（2007年2月）の発展企画として催されたものである。春柳社シンポの際は、国内外の発表者が十数名、参加者も全体で30名程度であったが、今回の新潮演劇シンポジウムはその倍以上の規模となり、当該領域の研究の進展と拡張を印象づけられる会合となった。

清末民初新潮演劇とは、華南師範大学側の代表である袁国興氏による造語であり、清代末葉から民国初期（おおよそ1900年頃から1920年前後）の中国演劇に生じたあらゆるニューウェーブ（新潮）を包括する概念である。このくくりによって、改良戯曲（雑劇・伝奇など）、改良京劇、演劇改良論など、中国演劇の近代化に伴う同時期の様々な現象が論究の対象となった。この分野は資料の充実や若手研究者の輩出などにより、ここ十数年の間に急速に研究が進展しており、今回のシンポジウムでも若手研究者の優れた発表が特に目を引いた。

二日間のシンポジウムは、大陸、台湾、韓国、シンガポール、日本の研究者計30名の発表により構成され、東洋演劇研究コースからは瀬戸宏、飯塚容、松浦恆雄、鈴木直子、李宛儒、波多野眞矢、大江千晶、陳凌虹、魏名婕、向陽および筆者の計11名が報告を行っている。分科会形式を取らず、全ての発表に全員が参加する形としたため、極めて密度の濃い交流の機会となった。また三日目には演劇改良の先駆けとなった梁啓超の故居の視察、および広州の地方劇である粤劇の観劇を行った。会期中、袁国興氏が二年後に中国国内で再度同様のシンポジウムを開きたいと提言しており、東洋演劇研究コースとしても引き続き協力をしていく予定である。

（事業推進担当者　平林宣和）

■特別講義

日時：2009年12月10日（木）13:00 ～ 15:00
会場：戸山キャンパス39号館中文研究室
講師：黄仕忠（中山大学中国古文献研究所所長・教授）
「明治期日本の中国演劇研究が王国維に与えた影響」

近代中国における演劇研究の先駆となった王国維著『宋元戯曲史』は1912年、日本滞在中に完成された。講義では王国維の日本滞在・経験がその後の彼の演劇研究に与えた影響について、講師自身が行った資料調査を基に紹介された。

日時：2009年12月24日（木）14:00 ～ 16:00
会場：早稲田キャンパス6号館318教室
講師：喩栄軍（上海話劇芸術センター・劇作家）
「上海話劇の現状」
講師紹介：飯塚容（中央大学教授・GCOE研究協力者）
コメンテーター：中尾薫（演劇博物館助手・GCOE研究員）

講義ではこれまで講師が約10年間に発表された29作品を順に紹介することを通じて、劇団・劇場・観客の各側面から現代上海の演劇事情について解説された。

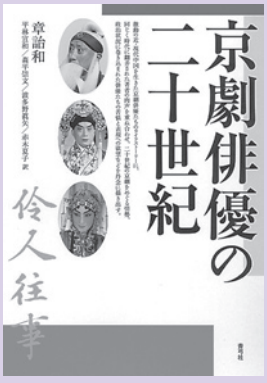
日時：2010年2月6日（土）15:00 ～ 17:00
会場：早稲田キャンパス26号館302教室
講師：田仲一成
（東洋文庫研究員・日本学士院会員・東京大学名誉教授）
「中国郷村における演劇の発生
ー徽州の儺戯・目連戯を中心とする考察ー」

中国において祭祀演劇が如何に発生したのかという問題を、講師の長年にわたる安徽省徽州一帯でのフィールドワークの成果に基づき、貴重な映像資料の紹介と日本や韓国との比較の視点も交えながら講義され、参加者に演劇の発生について考えるよい機会となった。

（研究助手　森平崇文）

新刊紹介

『京劇俳優の二十世紀』（章詒和著　平林宣和・森平崇文・波多野眞矢・赤木夏子訳　青弓社　2010年2月）



本書は馬連良・程硯秋・尚小雲・葉盛蘭・言慧珠・奚嘯伯・楊宝忠・葉盛長という20世紀を生きた8人の京劇の名優たちをとり上げ、彼らの演劇人としての輝きと戦争や政治運動に翻弄された波乱の生涯を、著者と各人との関わりや思い出、及び著者の時代経験や同時代中国に対する深い洞察とともに描いた列伝である。著者は中国芸術研究院戯曲研究所に長らく研究員として勤務した中国伝統演劇の研究者で、著者の父章伯鈞は1957年の反右派闘争において最大の標的とされた。本書は現代中国に対する舌鋒鋭い筆致と、俳優たちの真に迫る描写、そしてこれまであまり知れていなかった多数のエピソードの紹介によって、中国語圏の読者から熱い支持を受けるとともに、中国国内では発禁処分となっている。訳者はいずれも東洋演劇研究コースに所属する事業推進担当者・研究助手・研究員である。

本書は京劇に関する優れた評伝であると同時に、20世紀中国史を理解する上でも格好の入門書となっている。

（研究助手　森平崇文）

舞踊研究コース：

活動報告

後期に開催した3つの公開研究会について報告する。

■「バリ舞踊研究」

2009年11月6日（金）（17:00 ～ 20:30）

早稲田キャンパス6号館318教室

伏木香織氏（慶應大学他非常勤講師）による講演「バリ島社会の変容と芸能の現在」と猪野尾洋美氏（バリ舞踊家）による実演を交えた講演「バリ舞踊の技法と独自性」、及び質疑応答を行った。

伏木氏は博士論文としてまとめられた研究成果をもとに、急速に観光業が侵入し、多様な訪問者たちが溢れるバリ島における祭祀・芸能の担い手たちの変容と現状について、①アジア経済危機（1997年～）と「文化」による社会復興、②「アジェッグ・バリ（ゆるぎないバリ）」：バリ島爆弾テロ事件（2002.10 ～）以降のバリ島社会と芸能という2つの問題を中心に講演された。猪野尾氏は、20年余に渡る実践家としての実演を交えながらバリ舞踊の独自性について、身体各部位の基本動作と技法の特徴・象徴性・音楽との関係性などについて技術的側面から明確な提示をされ、民族舞踊研究者・大学院生他多数の参加者と共にバリ舞踊に関する研究の進展状況について理解を深める研究会となった。

■「韓国の現代舞踊―
舞踊教育と国際フェスティバルを巡って」

2010年2月3日（水）（17:30 ～ 20:50）

早稲田キャンパス6号館318教室

1963年、陸完順氏による韓国初の舞踊学科創設（梨花女子大学）を機にアメリカモダンダンスの導入が本格化し、その後55校にも膨張した舞踊学科が現代舞踊発展の原動力となる。やがて、ヨーロッパを中心にした舞踊団の来韓公演とワークショップ、若手舞踊家の海外研修などがモダンからコンテンポラリーへの展開に拍車をかける。

そのような発展様相について陸完順氏（社団法人韓国現代舞踊振興会理事長）は「韓国の大学における舞踊教育の発展と現状」と題して、大学舞踊学科の教科課程・卒業後の活動・振付家養成と雇用創出など、今後の課題も含めて研究発表された。金哲理氏（ソウル国際舞台芸術祭芸術監督）は「韓国における国際舞踊フェスティバル」と題して、国際舞踊フェスティバルの増加傾向とその特徴、さらにソウル国際舞台芸術祭の内容面の充実と運営面の課題について事例報告された。その後、多くの参加者と共に、日本とは異なる成長の道を歩んだ韓国のコンテンポラリーダンスの理解を深める討議を行い、有意義な研究会となった。

■「舞踊研究の可能性を拓く」

2010年2月12日（金）（13:00 ～ 18:00）

国際会議場共同研究室7

GCOE研究員と招聘講師との自由な討論から舞踊研究の裾野を広げ、その可能性を拓くことを目的に開催した。GCOE研究員の発表、①竹田恵子「ダムタイプによる作品≪S/N≫」、②北原まり子「バレエ《春の祭典》」、③許絹姫「晋州券番に伝承された妓生舞踊」に対して、招聘講師である鴻英良氏（演劇批評家）、毛利嘉孝氏（東京芸術大学准教授）、野村伸一氏（慶應大学教授）による最新の研究紹介を含めた専門領域からのコメントを頂戴し、各研究員の研究構想を新たな視点から深めると共に、活発な討論と情報交換によって舞踊研究の新たな可能性を拓く充実した研究会となった。

（研究助手　崔　柄珠）

『文楽　二十世紀後期の輝き―劇評と文楽考』（内山美樹子著　早稲田大学出版部　2010年2月）

本著は人形浄瑠璃研究の第一人者、内山美樹子教授の御退官を記念して出版された、著者二作目の単著である。昭和40（1965）年から平成10（1998）年までの新聞雑誌等に掲載された劇評類、および平成11・12（1999・2000）年の「上演メモ」他（雑誌等未収録）、そして付章として「本朝廿四孝」の戯曲論でもある「文楽時評　「本朝廿四孝」――如何に読み、どう演ずるか――」、が収録されている。文楽の公演劇評以外にも、女流義太夫、淡路人形浄瑠璃、民俗芸能などの評・紹介・追悼文を含み、読売新聞に掲載された著者の文章を網羅している。また、本著のサブタイトルに「劇評と文楽考」とある通り、年間回顧として『演劇年報』に掲載された「文楽考」がかなりの分量を占め、短い新聞劇評では味わえない著者の重厚な芸評・戯曲論が展開されている。浄瑠璃史の二十世紀（後期）を追体験出来る、浄瑠璃研究者必携の書であり、古典芸能や劇評、ひいては演劇に関心を持つ者に資するところが大いにあるだろう。

（GCOE研究員　原田真澄）

芸術文化環境研究コース：活動報告

■ F/Tユニバーシティ Vol.4　ロメオ・カステルッチ

フェスティバル/トーキョー（F/T）との提携により、作品発表のために来日中の世界的アーティストに直接作品づくりについて述べてもらう機会を実現した。

日時：2009年12月14日（月）16:00 ～ 19:00
場所：国際会議場3F第3会議室
講師：ロメオ・カステルッチ　（演出家）
聞き手：藤井慎太郎
（GCOE事業推進担当者・早稲田大学文学学術院准教授）

■ 公共劇場研究
「世田谷パブリックシアター―芸術創造を支える組織のあり方」

世田谷パブリックシアターより運営責任者をお招きし、創造活動を支える組織のあり方を検討する研究会を開催した。劇場の個別活動と舞台芸術政策（創造、普及、教育、雇用、税制など）についての包括的研究を目的とするこの研究会では、劇場運営情報を具体的に開示していただき、組織運営を学んだ。

日時：2010年1月12日（火）18:30 ～ 21:00
場所：国際会議場共同研究室7
講師：奥山緑（世田谷パブリックシアター）、矢作勝義（世田谷パブリックシアター）、恵志美奈子（GCOE客員講師、世田谷パブリックシアター）
聞き手：藤井慎太郎

■「演劇と近代日本・演劇環境部会～戦後演劇と鑑賞組織」

演劇をめぐる制度面からの日本近代演劇史の分析により演劇と社会の関係性を描く研究会シリーズの一環として開催し、労演などの鑑賞組織と戦後日本演劇の関わりを検討した。

日時：2010年1月16日（土）15:00 ～ 17:00
場所：早稲田キャンパス6号館318号室（レクチャールーム）
講師：伊藤裕夫（富山大学教授、GCOE客員講師）、戸舘正史（袋井市月見の里学遊館）

■ フェスティバル研究 『フェスティバル／トーキョー』

プログラム企画者と管理部門の責任者を迎え、昨年日本の演劇界に新風を吹き込んだ国際舞台芸術祭を多面的に検証した。組織、運営、予算などの実像を明らかにする一方、劇場以外の場所で発表された作品の創作過程をひもときながら、公共と演劇／芸術の関係性を問い直す機会とした。

日時：2010年1月25日（月）18:45 ～ 20:45
場所：早稲田キャンパス 6号館318教室（レクチャールーム）
講師：市村作知雄（「フェスティバル/トーキョー」実行委員長、東京芸術大学准教授）、蓮池奈緒子（「フェスティバル/トーキョー」事務局長）、相馬千秋（「フェスティバル/トーキョー」プログラム・ディレクター、GCOE客員講師）
聞き手：藤井慎太郎

■「ベルギー、フランダースの舞台芸術の歴史と現在」

過去四半世紀にわたって、ベルギー、とりわけフランダースの舞台芸術は、革新的かつ多様な創造性を見せ、世界をリードしてきた。舞台芸術の研究と創造の最前線で活動する専門家2人を迎え、全3回の研究会を開催した（西洋演劇研究コースと共催）。

日時：2010年1月29日（金）18:00 ～ 21:00、30（土）15:00 ～ 18:00、2月2日（火）18:00 ～ 21:00
場所：1/29 早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）、1/30 戸山キャンパス36号館演劇映像実習室、2/2 早稲田キャンパス26号館（大隈記念タワー）302教室
講師：ルック・ファン・デン・ドゥリース（アントワープ大学教授、演劇学）、サラ・ヤンセン（ドラマトゥルク、舞踊研究）
聞き手：藤井慎太郎

（研究助手　長嶋由紀子）

2009年度第二回グローバルCOE博士論文成果報告会

EVENT CALENDAR

日時：2010年3月11日(木) 13:00～17:50　会場：早稲田キャンパス6号館318教室(レクチャールーム)

演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」では、優秀な学位論文を提出された拠点関係者による報告会を開催しております。

プログラム（※入場無料・予約不要）

13：00～14：10　伊藤 りさ（日本演劇研究コース GCOE研究員）
源平物義太夫節人形浄瑠璃の作劇法考究　―説話的見地から―
早稲田大学　博士（文学）　2010年1月学位取得

14：10～15：20　小林 奈央子（舞踊研究コース GCOE研究員）
舞台における精神的なものについて― ワシリー・カンディンスキーの初期舞台コンポジション作品（1908/09）における身体性と運動について
ドイツ・ミュンヘン大学 Ph.D　2010年2月学位取得

15：30～16：40　木内 久美子（西洋演劇研究コース GCOE研究員）
サミュエル・ベケット作品におけるゲームとプレイの探求：言語ゲーム、ジャンルの交叉、文学の亡霊
イギリス・サセックス大学　Ph.D　2009年1月学位取得

16：40～17：50　梅原 宏司（芸術文化環境研究コース GCOE研究員）
戦後日本政治における「文化行政」の位置づけ―「文化」は国家戦略の中にいかに包摂されたか―
立教大学　博士（比較文明学）　2009年9月学位取得

編集後記　ニューズレター第7号をお届けいたします。手前味噌ではございますが、折り返しの3年目を締めくくるに相応しい充実した内容となりました。これもひとえに先生方や事務局の方々、研究員の皆さん、そして先輩助手の皆さんのお力添えの賜物に違いありません。この場を借りて皆さんに感謝の意を述べたいと思います。　（研究助手　菊地浩平（2009年11月1日着任））

News Letter 第7号
2010年3月15日
編　集：崔柄珠　埋忠美沙　菊地浩平　後藤大輔　長嶋由紀子　村瀬民子　森平崇文
発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」
拠点リーダー　竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム
〒169-8050　東京都新宿区西早稲田1-6-1
TEL：03-5286-8110
URL：http//www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html